

△研究ノート▽

ニーチェの真理・道徳批判

——ニーチェのプラトン・カント理解とショーペンハウアーの影響——

稲毛友壽

一 はじめに

本稿の主題は真理と道徳に対するニーチェによる批判が、ショーペンハウアーの思想から影響を受けたそのプラトン・カント理解^①に基づいていることを指摘する試みであり、このことを象徴する著作として初期の作品から『道徳外の意味における真理と虚偽について』(Ueber Wahrheit und Lüge in aussermoralischen Sinne)を取り上げ、そこに展開

される真理批判・道徳批判を、場合によっては一語一句に至るまで立ち入って検討する。次いで、『道徳外の意味における真理と虚偽について』における真理批判・道徳批判の論旨が、最晩期の『偶像の黄昏』にも貫徹されているいくつかの例を紹介し、ニーチェによる著作活動の最終境地における批判の哲学的論拠のひとつを明確にする。^{②③}

ニーチェ研究史を概観すると、その古典とも言え

るハイデガーの『ニーチェ』⁽⁴⁾をはじめ、幅広い先行研究を踏まえたネハマス⁽⁵⁾までもが後期思想を中心に取り扱うと明言した上でニーチェ論を展開しており、その傾向は例示した彼らに限らず見受けられ、初期や中期、なかでも特に初期が論じられる場合にはその特徴的な思想が「初期ニーチェ思想」として別個に取り上げられている感が否めない。⁽⁶⁾レーヴィットがニーチェの著作年代に『ツアラトウストラ』⁽⁷⁾第一部「三段の変化」を読み込んで以来、『ツアラトウストラ』に繰り返し現れる自己超克の概念とも相俟つて、ニーチェ研究において初期・中期・後期のうち初期と中期はそれぞれ克服された時期であるというイメージが浸透し、この傾向の強化に拍車をかけたと考えられる。上述のような論題を掲げたのは、そのようなニーチェ研究の傾向を刷新する必要性があると感じるためである。本論に詳述するように、ニーチェは一八八六年から一八八七年

にかけて過去の複数の刊行著作に序文を書いているが、これを言わば鵜呑みにして参照することにより後期ニーチェの意図に引きずられて初期の著作の真意を見損なう恐れは確かにある。だが、むしろ初期等の思想のどこが後期ニーチェの関心を引いたのか、それを丁寧に読み解くことで、ニーチェという思想家の全体像はより鮮明になるのではないだろうか。

二 『道徳外の意味における真理と虚偽について』における真理・道徳批判

所謂シュレヒタ版全集の編者カール・シュレヒタは著書『フリードリヒ・ニーチェ』⁽⁸⁾において、『道徳外の意味における真理と虚偽について』(一八七三年)を、その非常に印象的な冒頭⁽⁹⁾からして、ニーチェがそれまでに公刊したどの著作とも並べられず、彼が独自の主題と独自の言語を見出した作品で

あると評している。⁽¹⁰⁾ 同書は、一八八六年に執筆された『人間のな、あまりに人間的な』序文において、ニーチェがこの著作を回顧している点から論述を開始している。その序文には、「私は個人的にすでに道徳的な懐疑と混乱の最中にあり、すなわち同様にあらゆる従来のペシミズムの深化としての批判の最中であつた。そして、(……) ショーペンハウアー

すら信じられなくなつていた。まさしくその時期に、これまで秘めておいた著作『道徳外の意味における真理と虚偽について』が成立した。」(KSA, 2, 370) とある。シュレヒタの着眼は次のふたつとともに配慮を促してくれる点で重要である。すなわち、出版されることなく「秘めておいた著作」であつた『道徳外の意味における真理と虚偽について』が一八八六年頃のニーチェによつて特別な意味を帯びて再発見されたということ、そして誰よりニーチェ自身がそれをアピールしている、というふ

たつである。このことは、同著が、執筆当時には公刊されなかつたにもかかわらず、一八八六年以降のニーチェの思想に通ずる文脈を秘めているということとを暗示している。

ニーチェは『道徳外の意味における真理と虚偽について』のなかで当時の真理観を披瀝している。その要点は、言語が隠喩という方法を経て発生するということ、その言語をもとに任意に差異が忘却されることで概念が形成されるということ、そして概念により構築された世界に真理とそれに対する道徳的義務が生じるということに集約し得る。以下に、相互の脈絡にも注意を払いながら、それぞれの要点の詳細な検討を試みる。

1 言語の発生

『道徳外の意味における真理と虚偽について』において、ニーチェは言語に関する見解を、「我々は、

木、色、雪や花について語るとき、(……) 実はその隠喩を所有しているに過ぎず、この隠喩は元来の本質的特性とまったく一致していない。(……) したがっていずれにせよ言語の発生にあつて、ことは論理的に進行してはおらず、真理の人間、研究者、哲学者がそのうちで、それを用いて仕事をし、建築するところの全材料は、(……) いずれにせよものの本質に由来するのではない」(KSA. 1, 879) と表明している。言語がものの隠喩に過ぎないということは、言語がふたつの「隠喩 (Metapher)」を経て発生するというニーチェの洞察に基づいている。「まず神経刺激が像に翻訳 (übertragen) される。第一の隠喩。像が、今度は音声において再形成される。第二の隠喩。どちらも領域の完全な飛躍であり、まったく異なる新たな領域の真つただ中への飛躍である」(KSA. 1, 879) という直前の部分から自明のとおり、Metapher は übertragen の言い換え

であつて、異なる領域の間を飛び越える (übermeta) 持ち込み (ungen-phero) という意味での「翻訳」なのである。⁽¹¹⁾ この隠喩は、「直観的隠喩」(KSA. 1, 881) とか「直観隠喩」(KSA. 1, 882) とも呼ばれることから、直観的認識の所産であつて、「元来の本質的特性」との不一致という意味において「虚偽」の前提であると見なされる。ニーチェによれば、言葉を語る際に人間がその対象について知っていることは、二重の飛躍を挟んで得られた言わば非論理的な符丁に過ぎないのである。⁽¹²⁾

2 概念の形成

そしてこの言語から概念が形成されるのであるが、それは次のように論述される。少し長くなるが特に重要な箇所なので引用する。

「特になお概念の形成について考えてみよう。あ

らゆる言葉は、(……) 純粋に等しくないケースに適合しなければならぬということによって、直ちに概念となる。(……) ある木の葉が別の木の葉とまつたく同じであるなどということは決してないのは確実なだけに、木の葉の概念がこの個々の差異を任意に放棄することによって、区別する特徴となるものの忘却によつて形成されていることは確実であり、今やあたかも複数の木の葉の他に、ひとつの〈木の葉〉であるところの何か、例えば原型が存在していて、それにしたがつてすべての木の葉が織り成され、素描され、測定され、着色され、襞をつけられ、彩色されているが、不器用な手でそのようなことがなされるためにどのサンプルも結果的に原型の忠実な模像としては不正確で信頼できないかのようなイメージを喚起する。」(KSA.1, 879)

「概念の形成」とは、ショーペンハウアーが著『意志と表象としての世界』において理性に帰属させた「唯一の機能」(WV. Ester Band, 75)である。ニーチェがショーペンハウアーから受けた影響のうち、おそらくもっとも重要な影響のひとつは、この定義の継承である。地味ではあるが、この理性の定義は、ショーペンハウアーが哲学史上初めて提唱したと自負し⁽¹⁴⁾、敬意を表してやまないカントの定義をはつきりと論難して自己の主張を際立たせる点なのである。ニーチェは、「悟性と」同様に理性もまた唯一の機能をもつ。それは概念の形成である」(WV. Ester Band, 75、括弧内は筆者による補足)というショーペンハウアーの立場をぎわめて素直に踏襲している。ただしニーチェは、理性による抽象的認識と理性を欠く直観的認識それぞれの具現者として人間と動物とを対比させがちなショーペンハウアーとは異なり、「理性的人間と直観的人間」

(KSA. 1, 889) という対照において概念や抽象に導かれる人間と隠喩や直観に導かれる人間とを論じる。¹⁵⁾ ショーペンハウアーは概念を、「原像である直観的世界の模像、反復であり、まったく異質の素材における、独自の手法による反復」(WWV. Erster Band, 77) と呼び、「普遍性、すなわち個別的なものによつて規定されていないことが理性の抽象的表象としての概念に本質的であるがゆえに、異なるもの(verschiedene Dinge) が同一の概念によつて思惟され得る」(WWV. Erster Band, 79) と述べている。先の引用からは、ニーチェがこうしたショーペンハウアー思想における概念の特徴をも踏襲し、そのうえで概念形成における「差異 (Verschiedenheiten)」の捨象という側面を強調していることが分かる。そしてこの捨象、すなわち「等しくないものを等しいものとすること」(KSA. 1, 879) によつて形成された概念が、原像である直観的世界に対して、模像で

ありながら、その原型であるかのようなイメージを喚起すると言うとき、ニーチェは西洋哲学史上もつとも古い伝統をもつプラトンのイデア論を念頭に、イデアの価値を引き下げようとしている。というのも、この「原型 (Urform)」¹⁶⁾ という言葉を追うと、「諸事物の非の打ちどころのない不滅の原型を見て楽しむために、永遠のイデアの国に入る」(KSA. 1, 884) という『ギリシア悲劇時代の哲学』(一八七三年) におけるプラトンに関する叙述を経て、ショーペンハウアーが『意志と表象としての世界』においてプラトンの「永遠のイデア」を「万物の原型」と呼んでいる箇所 (WWV. Erster Band, 236) にまで辿り着くからである。なお、ここまで解説されればすでに自明であるが、「織り成され、素描され、測定され、着色され、髪をつけられ、彩色され」というイメージは、イデアを手本として世界を製作するデミウルゴスのものである。¹⁷⁾

3 真理の世界

このような概念の形成の能力は、「像を概念へと分解する能力」(KSA. 1, 881)とも呼ばれ、「概念で造られた大建築」(KSA. 1, 882)とか「数学的に区画された概念の天空」(KSA. 1, 882)とも言うべき「理性の領域」(KSA. 1, 883)を現出させる。ニーチェによるこうした叙述は、丹念に読むと、カントの『実践理性批判』結語を意識して書かれたものであると考えられる。『実践理性批判』結語は、「熟考する回を重ね、時を費やすたびごとに、私の心をいつも新たな、そしていよいよ高まる感嘆と畏敬の念で満たすものがふたつある。それは、私の頭上にひろがる星のちりばめられた天空と、私のうちにある道徳律である」(KPV. 300)という、非常に有名な文句で始まる。ニーチェは『道徳外の意味における真理と虚偽について』において、そもそも真理とは理性にとつてのみ、すなわち概念によって構成され

た理性の領域においてのみ妥当するものであると考えており、「あらゆる民族は頭上にそのような数学的に区画された概念の天空をもっていて、今や真理の要求のもとに、すべての概念の神がその縄張りのうちでのみ探し求められるということを理解する」(KSA. 1, 882)と語り、概念によって理性の領域を構築する人間を「この(建築の天才という)点で非常に感嘆に値する」(KSA. 1, 883)括弧内邦文は筆者による補足)と評している。すなわち、概念とそれにより構築された天蓋そのものに目を向けつつ、さらにそれらの形成者にして構築者である人間をも含めて感嘆に値するという表明により、星空を仰いで感嘆しつつ人間の認識能力に思いを巡らせていたカントの述懐をニーチェなりに言い換えているのである。また、原則に適った理性の使用により現象が「その構成要素と外面化している諸力に分解され数学的に処理される」(KPV. 301)ことで「世界

という建築に対する明晰にして未来永劫変わらない洞察を引き出す」(KPV: 301)という『実践理性批判』結語のカントの言葉を借用して、ニーチェは理性の能力を「分解する」能力と呼び、理性の領域を「数学的に区画された概念の天空」や「概念で造られた大建築」に譬えている。カントとニーチェ双方の比較的短いテキストを検証して得られる複数の箇所における用語とそのニュアンスの一致は、ニーチェによるカントへの暗黙の言及の証左であると言えよう。

4 道徳的義務

ニーチェによれば「理性の領域における〈真理〉の探究と発見」(KSA. 1, 883)とは、「茂みの背後にものを隠して、それをちようどそこで再び探して見つける」(KSA. 1, 883)ような探求と発見である。真理とは「哺乳類の定義を行って、それから駱駝を

見物した後で、見たまえ哺乳類である、と説明する」(KSA. 1, 883)ようなトリートロジーであり、「空っぽの莢」(KSA. 1, 878)⁽¹⁸⁾と換言されることから、やはりひたすら概念的なものであることが分かる。理性は、自ら製作した概念という道具によって構築される舞台で、言わば自作自演を行っているのである。「〈真理〉の探究と発見」がその価値を認められるのは、それが「突然の印象によって、直観によってさらわれること」(KSA. 1, 881)を回避させてくれるからであるが、もとをただせばそのことが社会における個の保身と社会の存続を可能にするからであり、その限りニーチェは真理を社会契約説の文脈⁽²⁰⁾で発生する「真であるべしという義務、すなわち慣例の隠喩を使用せよという義務」(KSA. 1, 882)、「したがって道徳的に表現すれば、確固たる慣習に従って嘘をつけ、群れをなして万人にとつて拘束力のあるスタイルで嘘をつけ」という義務⁽¹⁹⁾

(KSA. 1, 881) に結びつける。その結果、義務は「道徳的な、真理に係属しているという気持ち」(KSA. 1, 881) を喚起し、真理の世界は義務的という意味で「命令的な世界」(KSA. 1, 882) と解されることになる。これは、「有限の理性的存在者にとって道徳律は命令である」(KPV. 143) といったカントの言説を踏まえた解説であり、ニーチェに言わせると、「私のうちなる道徳律」も概念的世界のうちに探し求められているのである。

ここまで『道徳外の意味における真理と虚偽について』の要点を通観してすでに明らかであるかもしれないが、ニーチェの真理批判・道徳批判は、ショーペンハウアーによる理性の定義にしたがってプラトンのイデア論⁽²⁾とカントの実践理性批判を再考した成果である。『道徳外の意味における真理と虚偽について』にショーペンハウアー、カント、プラトンの名が一度も出てこないとしても、これだけの

用語の一致を思えば、そのことは疑い得ない⁽²⁾。ショーペンハウアーは「概念は地上で人間だけの所有物であり、人間をあらゆる動物から区別するその概念のための能力が、古来、理性と名付けられてきた」(WWV. Erster Band, S.35) にもかかわらず「カントだけがこの理性の概念を混乱させた」(WWV. Erster Band, S.35) ことを、カントが理性の何たるかを真剣に調べ上げたならば「理性を思弁理性と実践理性に分けたり、後者を道徳的な行為の源泉としたりしなかったであろう」(WWV. Kritik der kantischen Philosophie, 552) と、カントの錯誤として切り捨てる。だがニーチェは、ショーペンハウアーの理性の定義を踏まえながら、むしろそれによつてカントの道徳論において想定される可想的世界が思惟によつて付け加えられたものであることを指摘しているのである。

ここに改めてシュレヒタの『フリードリヒ・ニー

「チエ」を振り返ると、シヨールペンハウアーがプラト
ンとカントに格別の敬意を払っていることを勘案す
るならば、その両者を批判する『道徳外の意味にお
ける真理と虚偽について』は、確かに、「シヨールペ
ンハウアーすら信じられなくなっていた」時期に成
立し、かつプラトンとカントからも離反しつつ「独
自の主題を見出した」作品と言えるだろう。だが、
これまで確認してきたことから、シヨールペンハウ
アー、カントの用語をふんだんに援用している以
上、ニーチェが『道徳外の意味における真理と虚偽
について』において「独自の言語を見出した」と言
われることには、それらの用語を駆使しつつ、独自
の洞察に基づいた思想を展開したという含意のある
ことを補足する必要がある。シュレヒタが「独自の
言語」という言葉で「独自の洞察に基づいた思想」
を意図していたということは十分に考えられるが、
彼の『フリードリヒ・ニーチェ』には『道徳外の意

味における真理と虚偽について』の叙述にシヨール
ペンハウアーとカントの用語との関連性を指摘しよう
とした論述はないからである。

また、シュレヒタによれば、『道徳外の意味にお
ける真理と虚偽について』の主題はニーチェの後の
作品においても有効なまま認められる。⁽²⁵⁾だがその指
摘は、主題に関する叙述がほぼ要約の域を出ないこ
とから、不十分と言わざるを得ない。そこで次節
は、これまでの本論による主題解読の成果を踏ま
え、同じ主題が後の作品において有効なままである
例を示す。

三 後期思想における展開

ニーチェ最晩期の著作に『偶像の黄昏』がある。
これは、副題に「いかにして鉄槌を手に哲学する
か」と書き添えられ、序文に「あらゆる価値の価値
転換」が掲げられていることから分かるとおり、従

来の哲学説の批判を主眼とする哲学的著作である。

『偶像の黄昏』における「哲学における〈理性〉」という章は、哲学の営為が理性による概念の操作に過ぎず、²⁶したがって「真の世界」とは虚言によって付け加えられたものに過ぎない」（KSA. 6. 75）、すなわち真の世界は「虚偽」（KSA. 6. 75）であるという真理批判を含んでいる。ここで虚偽であるとは、「言語は、その発生によると、心理学の初歩的な形式の時代に属している。言語形而上学の根本的な前提条件、はつきり言うと理性の根本的な前提条件を意識すると、我々はがさつな呪物体系に陥る」（KSA. 6. 77）と言われるように、その発生に鑑みて表示対象の元来の本質的特性と一致してはおらず、その婉曲な象徴として使用される呪物に比せられるような言語を前提としている²⁷という意味である。言語の「発生」についての考察と、それを根拠とした「虚偽」という判定が、すでに『道徳外の意味に

おける真理と虚偽について』に見出されるものであることは、つい先ほど確認されたばかりである。

「哲学における〈理性〉」に次ぐ「いったいかにして〈真の世界〉はお伽斬りになったか」は、哲学史における「真の世界」観の変遷の記述である。そこで真の世界は、プラトンによって創始され、カントによって継承されたものとして記述される。プラトンにとって「真の世界は賢人、敬虔な者、有徳者には到達可能である」（KSA. 6. 80）のに対し、カントにとつて「真の世界は、到達不可能、証明不可能、約束されざるものであるが、ともかく思惟されるものとして慰めであり、義務であり、命令である」（KSA. 6. 80）。初期ニーチェの理解において、プラトンが「永遠のイデアの国に入る」のに対し、カントの道徳的（可想的）世界が「義務」であり「命令的」であったことはすでに見たとおりである。また、なによりも「いったいかにして〈真の世界〉

はお伽噺になったか」に登場する哲学者がプラトンとカントの二人（だけ）であるという事実が、同じ二人を批判した『道徳外の意味における真理と虚偽について』との連続性⁽²⁸⁾を物語っている。

四 結び

本稿では、まず『道徳外の意味における真理と虚偽について』を取り上げ、専門用語に限らず日常単語も含めた言葉の詳細な検討を行い、そのことによつてニーチェがショーペンハウアーの影響を受けつつプラトンやカントの言説を意識した叙述を行っているという新たな読み方が獲得された。

また、そうした先哲の影響著しい初期思想が、最晩期にニーチェが到達した思想的境地の表現に生かされていることを論述した。これは、ニーチェが、一八八六年から一八八七年にかけて執筆した所謂

「七つの序文」⁽²⁹⁾における過去の著作の回顧を契機に、利用可能と判断した部分を「あらゆる価値の価値転換」(そこには、無論、真理・道徳批判が含まれる)というアクチュアルな問題圏へと積極的に援用していることの指摘であり、⁽³⁰⁾実際に用語や思考の上で一致ないし連続した部分が確認された。

こうした読解によつて、初期および中期を克服して後期に至ったニーチェという従来のニーチェ像は薄れ、過去の著作を振り返りつつ自説を積み重ねるように思索する新たなニーチェの姿が浮かび上がった。これは言えないだろうか。⁽³¹⁾そしてそのようなニーチェの姿は、後期思想をことさらに重視したり、特に初期の思想をそれだけ別個に取り扱いがちであった従来のニーチェ研究に変革を迫るものではないだろうか。

(いなげ ともひさ＝一般)

凡例

Kritische Studienausgabe, 15 Bde, Hrg. von G. Colli/M. Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag, München/Walter de Gruyter, Berlin/New York からの引用・参照の際は、KSA の略号の後に、巻数と頁数を記載する。

Arthur Schopenhauer, *Die Welt als Wille und Vorstellung*, Deutscher Taschenbuch Verlag, München 1998 からの引用・参照の際は、WWV の略号の後に、Band と頁数を記載する。

Immanuel Kant, *Kritik der praktischen Vernunft*, Werkausgabe Band VII Herausgegeben von Wilhelm Weischedel, Suhrkamp Taschenbuch, Frankfurt 1968 からの引用・参照の際は、KPV の略号の後に、頁数を記載する。引用中の (……) は中略を、〈 〉 は原文の、をを表す。

註

(1) そうしたニーチェの理解の正否の検討は、主旨から逸れることと、紙幅の都合から、本稿におおむね扱われない。

(2) 本稿は、遺稿のなかに最後の作品『この人を見よ』に続く著作計画が何も記されていないことから「ニーチェ

の思想はすべて、公刊された著作の中で表現を与えられていると考えねばなりません」(清水真木、『知の教科書ニーチェ』、講談社選書メチエ、二〇〇三年、六八頁)という先行研究の成果を踏まえ、遺稿には立ち入らないため、最晩期の著作のひとつである『偶像の黄昏』をこのように見らる。

(3) 言うまでもなく、ニーチェ後期思想における真理批判・道徳批判は、彼の宗教に対する姿勢に強く方向付けられている。本稿は、批判の解説においてよく言及されるこのことには触れず、初期思想から通底する(にもかかわらず、後期思想解釈において等閑視されてきたように思われる)哲学的見解に注目し、批判の論拠として有効であることを示す。

(4) ハイデガーは著作のすべてにニーチェ本来の哲学が含まれていないとし、それは主著のために書きためられた遺稿として残されていると述べている (Vgl. Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Band 6.1, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1996, S.6f)。

(5) cf. Alexander Nehamas, *Nietzsche: Life as Literature*, Harvard University Press, London, 1985, p.9. (アレクサンダー・ネンマス、『ニーチェー文学表象としての生』、理

想社、二〇〇五年、一七頁)

- (6) 『知の教科書ニーチェ』の清水氏も、一般的な初期・中期・後期の三区区分とは一線を画し、四期の著作時期を設定するが、第一期と第二期には病気の時期という性格を与え、『知の教科書ニーチェ』、講談社選書メチエ、二〇〇三年、六一頁を参照)、本稿が取り上げる『道徳外の意味における真理と虚偽について』も「思想的な破綻が明らかに」なった作品と断じているが(同上、一七一頁)、本稿はこうした説には与しない。また、視点を変えて統計的に見ても、国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ CINI でタイトルに「初期ニーチェ」を含む論文を検索すると三二件、「中期ニーチェ」と「後期ニーチェ」ではそれぞれ八件、五件の該当が得られる(平成二二年二月現在)。CINI は論文データベースとして完全なものとは言えないが、この数字はやはり、ニーチェの初期思想をただ「ニーチェ思想」と言う場合とは区別すべきであると考える研究者が(日本に)多いということ、中期・後期と時期をくだるに於いてその傾向が薄れるということを示している。
- (7) Vgl. Karl Löwith, *Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen*, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart, 1956, S.28.

(8) Anni Anders との共著。

- (9) Vgl. KSA. 1, 875.
- (10) Vgl. Karl Schlechta und Anni Anders, *Friedrich Nietzsche*, Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart, 1962, S.15.
- (11) ちなみにふたつめの隠喩は、「音声における (in einem Laut)」再現に nachformen という単語が使用されているが、第一の隠喩と同様に「音声 (in einem Laut)」変換が語られていたとしたら übertragen が使用されるはずである。
- (12) なお、ニーチェはこの「言語の発生」を、生理学的見解に基づきながら芸術的現象として論じる。そのことについて、本稿では論旨を簡潔にするため言及を避けたが、特に詳しい著述として次の箇所を挙げる。山本恵子、『ニーチェと生理学』、大学教育出版、二〇〇八年、八七頁。
- (13) Vgl. WWV, Erster Band, 75.
- (14) Vgl. WWV, Erster Band, 75.
- (15) Vgl. KSA. 1, 886ff.
- (16) 訳語については、次の箇所を参考にした。鎌田康夫・齋藤智志・高橋陽一郎・白木悦生、『ショーペンハウ

アー哲学の再構築』、二〇〇〇年、二二〇頁（註一九）。

(17) なお、ショーペンハウアーはイデアと概念を区別している（鎌田康夫・齋藤智志・高橋陽一郎・白木悦生、『ショーペンハウアー哲学の再構築』、二〇〇〇年、二二一頁を参照。理性の定義を共有しながらも、ニーチェはショーペンハウアーとは異なる思索を展開するのである。この相違が何に由来するかということについての詳細な検討は稿を改めて行わざるを得ないが、『道徳外の意味における真理と虚偽について』においてニーチェが直観的認識でも抽象的認識でもない認識というものを想定していないことに関係していると推察される。ニーチェは「事物の純粹認識」(KSA, I, 882)に言及してこれを認めない立場を示唆しており、ショーペンハウアーが「純粹認識」を「イデアの把握」としている (Vgl. WWV, Erster Band, 418) ことを考えると、そのような認識を否定し、結果的にイデアを概念と同一視することになったと考えられる。本稿においては以上の見通しにとどめ、詳細は今後の課題としたい。また、この相違は、ショーペンハウアーとニーチェがプラトンに対して両極端な態度を示すことの端緒とも見ることができ、同じ理性の定義を共有しながらその対象の範囲をいかに設定するかによって思想的立場に正反対の傾向

をもたらししているのではないかという仮説は考証に値しようが、これもまた他日に期すこととしたい。

(18) 「空っぽの莢」とは、ショーペンハウアーが概念を譬えて使用する表現である (Vgl. WWV, Zweiter Band, 76)。

(19) 『道徳外の意味における真理と虚偽について』において、ニーチェは社会契約説に言及して、本来の生は「万人の万人に対する戦い」であり、そうした状況を回避するための「平和条約」としての真理を論じている (Vgl. KSA, I, 877)。すなわち、自ら作ったルール、守るべきルールという性格が真理とそれを構成する概念に付加されており、その意味で自作自演と言える。また、このことは、共同体とは同一の意志のもとに群居する人間の総体であり、共同体の意志は概念の使用を通じて一切を共通理解の対象、すなわち自己の内部で取扱い可能なものに変えることで存続していると換言することができる。ショーペンハウアーもまた、概念の使用に「あらゆるものを己の思考空間に取り込み、操作可能なものに還元する（すなわち、その空間の中に強引に位置づける）ことによつて支配しようとする意志の契機」（齋藤智志、「概念はどのように使われなければならないか」、日本ショーペン

ハウアー協会編『ショーペンハウアー研究』第一二号所収、二〇〇七年、七三頁)を見ており、この点でもニーチェとショーペンハウアーの思想的連関が指摘され得る。

(20) Vgl. KSA. 1, 877.

(21) ショーペンハウアーとイデアの扱いにおいて相違することから、結果的にはショーペンハウアーのイデア論も批判されていると言える。

(22) 『真理の情熱について』という著作において、『道徳外の意味における真理と虚偽について』とほぼ同じ文章に続けて「哲学者は、自分が眠れる者を揺り起こしていると言じながら、さらに深い魔術的なまどろみに沈み込むのである。そうしておそらく彼は、〈イデア・理念 (Idee)〉の夢を、〈不死〉の夢を見ているのである。」と語られる箇所がある。プラトンの哲学がイデアと魂の不死を説いていることは有名である。ただ、カントの道徳論も「魂の不死」という「理念」を要請している (Vgl. KPV. 252 und 264) こと、またカントがヒュームによって「独断のまどろみ」から目覚めさせられたとニーチェは知っていた (Vgl. KSA. 11, 483) ことから、「ここで『哲学者』としてニーチェの念頭に浮かんでいるのはカントであろう。このこともまた、『真理の情熱について』や『道徳外の意味におけ

る真理と虚偽について』における一連の思想がカント批判を含んでいることを示している。

(23) 本稿の構成に即して簡略化すると、「言語の発生」に関する自らの洞察に基づいて、「概念の形成」以降の叙述にショーペンハウアーとカントの用語を援用しつつ独自の真理観を語っていると言える。

(24) なお、シュレヒタが当時のニーチェに独自の語り方として特に注目する『道徳外の意味における真理と虚偽について』の冒頭すら、筆者には『意志と表象としての世界』続編の冒頭に触発されていると思えてならない (Vgl. WWV. Zweiter Band, 11)。

(25) Vgl. Karl Schlechta und Anni Anders, *Friedrich Nietzsche*, Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart, 1962, S. 18.

(26) Vgl. KSA. 6, 74.

(27) Vgl. KSA. 6, 77.

(28) 思想の大局においては、当然、初期と後期の間には相違がある。例えば、『道徳外の意味における真理と虚偽について』には「物自体という謎めいたX」(KSA. 1, 879) などという表現から所謂「物自体」を想定する態度が垣間見られるが、周知のように後期においてそれは全面否定を

れる。こうした変化にもかかわらず認められる連続性は、ニーチェ思想における重要性と見てよいだろう。

(29) 清水真木、『知の教科書ニーチェ』、講談社選書メチエ、二〇〇三年、一七九頁。

(30) 逆の見方をすれば、本稿の指摘は、『道徳外の意味における真理と虚偽について』のなかで一八八六年のニーチェによって再発見された論点、後期に利用可能と見なされアクチュアルな問題圏に組み込まれた論点を、『偶像の黄昏』の読解から明確化する試みとしても提示し得る。その場合、「いったいいかにして〈真の世界〉はお伽噺になったか」に登場する哲学者がプラトンとカントのふたり(だけ)であるということは、プラトンとカントの名が一

度も登場しない『道徳外の意味における真理と虚偽について』を、その両者に対する批判として読み解く解釈の妥当性を裏付ける事実となろう。ただし、『道徳外の意味における真理と虚偽について』そのものに重要性を認める立場から、本稿はそれを構成に反映させた。

(31) また、レーヴィットがニーチェの著作年代に読み込んだ「三段の変化」(『ツアラトウストラ』第一部)のうち驢馬にあたる初期に強く、獅子にあたる中期によって否定されると見なされてきたシヨーペンハウアーの影響が、部分的に、最晩期に至るまで有効であるということも、この新たなニーチェ像の示す特徴である。